

短期派遣 EUROPA 派遣報告書

平賀陽子

派遣先：パリ第3大学通訳翻訳高等学院（ESIT）

派遣期間：2011年9月27日～2011年12月23日

【派遣の概要】

ESITでは、会議通訳者養成のための通訳科、主に日本語科の演習に研修生として参加した。カリキュラムの構成は本学通訳コースと同じく、修士1年で逐次通訳、修士2年で同時通訳を学ぶ。日仏通訳演習、仏日通訳演習は修士1年、2年両方の授業に出席していた。逐次通訳訓練は既に1年間受けてきたが、ESITでの逐次通訳演習を訓練の繰り返しと覚えることは全く無く、同時通訳を含め、自身の通訳を見直すという貴重な機会となった。通訳時間の長さ等、異なるスタイルの訓練が、技術向上へつながることを自ら体験することができた。

通訳演習では、通訳の需要がある分野、時事問題を中心としたテーマを扱った。1年生は身近なテーマから徐々に難易度を増していき、文化、経済、国際関係、技術開発、環境問題等のスピーチの通訳を行う。特に環境問題に関するスピーチは大変勉強になった。修士修了研究で環境問題をテーマにしていたため、その用語集の実用性を考える場となった。専門的な内容を扱うことが多くなるにつれ、ディスカッションも充実し、授業以外でも日本語科の学生で集まり練習をしていた。

通訳・翻訳理論も受講し、基本的には講義形式の授業だが、活発な議論に大いに刺激を受けた。通訳科、翻訳科の学生が参加するため、普段、演習の授業では会わない翻訳科の学生とも交流することができた。ESITの学生の言語コンビネーションの多様性は理論の授業にも現れており、何か国語もの例文は非常に興味深いものだった。

方法論は、会議通訳科の修士1年生の必須科目となっている。言語のレベルについては、入学時から既に非常に高いが、この授業では通訳技術の基礎だけで

なく、パブリック・スピーキングやスピーチの構成についても学ぶ。通訳者にふさわしい話し方を身につけることも、ESIT で重視されていることがよくわかる。現役の通訳者として活躍していらっしゃる先生方の指導では、話し方を指摘されることも少なくなかった。

以上の演習や講義から学んだことを反映し、ESIT の図書館や国立図書館で閲覧可能な資料から情報を収集し、修士修了研究内容の充実を図った。

【成果および今後の課題】

修士修了研究「環境問題に関する用語集」の作成において、ESIT の先生方からの指導で、研究と実務の結びつきを考えることが必要であると学んだ。環境問題は、今後も通訳、翻訳の需要が見込まれる分野であるため、さらなる研究が求められる。今回の用語集作成に限らず、通訳、翻訳に関わっていく者として、実務と研究を関連させることは今後も続けていかねばならない課題であると感じている。

また今回の派遣を通じ、自身の通訳訓練だけでなく、教育者側の視点から、通訳者教育にも貢献したいという思いが強くなった。通訳者養成の教育方針を確立することは容易ではない。ESIT では、A 言語（母語）への訳出を基本としており、B 言語（第2言語）、C 言語（第3言語）への訳出は修了試験で求められていない。しかし実際にマーケットの需要を考えると、A 言語への訳出だけでは通訳者は務まらず、特に、日本語のように、通訳者の数が少ない場合には、仏日の通訳をせざるを得ない。また、フランス語と英語のように、英語を含む言語コンビネーションの場合には、ヨーロッパでは通訳者の層が厚いため、ほぼ完璧なバイリンガルであることが求められる。また、教育方針、訓練内容が訓練生の通訳の癖にもつながることを認識しなければならない。ESIT の学生は、進級試験および修了試験の性質上、情報の抜け落ちがあっても文章を完結させることを優先する傾向にあるそうだが、実際の現場では、正確さ、迅速さは必須となる。したがって、通訳者教育に携わるためには、実際のマーケットの需要に応える人材を育てることが必要となる。

ESIT での通訳訓練を受け、そこで学んだことから修士修了研究を充実させることを今回の派遣の大きな目的と掲げていた。実際には、さらに教育者としての視点、通訳教育の効果や意義について考える貴重な機会を得られたことも、大きな収穫であったと感じている。修士修了研究を到達点とせず、通訳実務と結びついた研究を引き続き行うこと、そして通訳者教育の質向上につながる研究が今後の課題である。特に後者については、本学と ESIT で通訳訓練を受けた経験から、将来の通訳者養成に貢献したいと考えている。